

# 万博遺産

橋爪節也  
Hashizume Setsuya

## 第5回

### ニュージーランド館を吹田に発見 — EXPO'70のモニュメント

EXPO'70のパビリオンやモニュメントが移築され、思わぬところで出くわすことがある。

大阪中之島の国立国際美術館にあるジョ

[写真上] ロイ・コワン作 タイル壁画。日本とニュージーランドとの地理的な関係を示した作品。太平洋は8000枚のタイルで、ニュージーランドの地形は銅鉄を溶接し作っている。  
[写真左] 彫刻家のW・R・アレン作のステンレスレリーフは、ニュージーランド館の中庭に設置されていたもの。長さ14フィートのステンレス棒9本から構成され、約2/3の高さの位置に、かつては16枚の色彩板が取り付けられていた。先端に別のステンレス棒が空に向けて取り付けられ、その根元に球体が付属。  
写真提供/吹田市立中央図書館



ジョアン・ミロ作『無垢の笑い』(縦5m、横12m)。日本ガス協会がガス・パビリオンのために依頼したもので、ミロ自身がEXPO'70のために来日し作品の取り付け指導を行った。現在は大阪市北区中之島にある国立国際美術館のロビーに展示されている。

所蔵/国立国際美術館

©Successió Miró / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021 E4339

アン・ミロ(二八九三〜一九八三)の陶板壁画『無垢の笑い』が、ガス・パビリオンのために制作・展示されたことは有名だが、ほかにもシドニーと姉妹港である四日市には、北斎の『富嶽三十六景』にインスピレーションを得たオーストラリア館が移設され、二〇一三年まで活用された。愛知青少年公園(現在の愛・地球博記念公園)に移されたフジパン・ロボット館は老朽化で撤去されたが、手塚治虫プロデュースのロボットは「愛・地球博」(二〇〇五年)にも出展され、いまでも愛知県児童総合センターで動いている。

最近出くわした万博の記念物が、万博の開かれた吹田市の市立中央図書館に残るニュージーランド館のモニュメントである。

図書館一階に、ニュージーランドの陶芸家ロイ・コワン(一九一八〜二〇〇六)制作の八千枚のタイルによる太平洋と鋼鉄で作られたニュージーランドのモニュメントがはめこまれ、屋外には、W・R・アレンのステンレス

の球体と天を突く棒で構成された彫刻が設置されていた。一九七二年竣工の図書館の建築も時代の感覚を現代に伝えてゾクゾクする。

図書館の話になったので、EXPO'70にちなんだ小説もあげておこう。SFの巨匠筒井康隆の『人類の大不調和』は、夜になると万博会場にベトナム戦争で虐殺が行われたソンミ村や、大飢饉に襲われたビアフラのパビリオンが出現するというブラックキューモアに富んだ作品である。大阪万博に先立つ一九六八年に書かれた眉村卓『EXPO'87』は、一九八七年に再び日本で万博が開催されるという近未来小説であり、これらの作品にも時代の雰囲気濃厚だ。

そして文学と万博の思い出で強烈な印象を残すのが、万博閉幕の二ヶ月後の十一月、作家の三島由紀夫(一九二五〜七〇)が「楯の会」会員らと自衛隊市ヶ谷駐屯地を訪れ、檄文を撒き、割腹自決した事件である。

事件の再検証が進められているが、EXPO'70にまつわる記憶は次から次へと結びつき、突然、心の中に時代のモニュメントのように立ち上がってくる。

#### ◆ 橋爪節也 (はしづめ・せつや)

大阪大学総合学術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市教育委員会事務局文化財保護課、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室学芸員等を経て現職。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大阪百景』、『大阪イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。